

ZAONDEKOZA

映画監督加藤泰 生誕100年
幻の遺作遂に封印が解かれる！

第73回
ヴェネチア国際映画祭
クラシック部門上映

第17回
東京フィルメックス上映

おんげざ 鬼太鼓座

デジタルリマスター

出演
河内敏夫
林英哲
大井良明
藤本吉利
高野巧
風間正文
近藤克次
鎌田豊数
富田和明
小幡キヨ子
小島千恵子
梅沢容子
山本春枝
鈴木春美
森みつる

監督……………加藤 泰
脚本……………仲倉重郎
撮影……………丸山恵司
照明……………野田正博
録音……………西崎英雄
編集……………富宅理一
電子音楽……………一柳慧
美術……………梅田千代夫
美術デザイン……………横尾忠則
製作主任……………池田義徳
題字……………粟津潔
製作……………田耕
プロデューサー……………田中康義

「ぎ・鬼太鼓座」デン事務所・松竹・朝日放送 1981年製作
「ぎ・鬼太鼓座」デジタルリマスター 制作：松竹/松竹映像センター 制作協力：IMAGICA
配給：松竹メディア事業部 ©1989「ぎ・鬼太鼓座」製作委員会
カラー/シネスコ/105分



ドキュメンタリーもフィクションも超える 映画の臨界点!!

イベント上映以外は広く一般公開されず、いわば幻の映画となった、世界的名匠・加藤泰監督の遺作にして異色のドキュメンタリー「ざ・鬼太鼓座」。完成当時、試写の舞台挨拶で「生まれて始めて思う通りのことをやれた映画」と監督自身が語ったといわれる本作は佐渡ヶ島の芸能集団「鬼太鼓座」(※)の若者たちを主人公に、セット撮影も含め、約2年かけて製作された。

その完成から35年、加藤泰監督生誕100年を記念して、35mmネガフィルムを解像度4Kでスキャン、2Kでデジタルリマスター作業を行い、製作当時のスタッフ監修のもと、色調を再現。改めて海外の注目を集めた本作は、第73回ヴェネチア国際映画祭クラシック部門でワールドプレミア上映され、日本プレミアは第17回東京フィルメックスに決定。遂に、劇場公開となった。

(※)その後、鼓童、鼓童から独立した林英哲、田耕が新たに結成した鬼太鼓座が、現在も国内外で演奏活動を続けている。

加藤泰 監督
(1916-1985)

1937年に東宝砦撮影所に助監督として入社、戦後、東映を中心に松竹、東宝でも作品を作り続けた。ローアングル、長廻し、徹底した同時録音などを特徴とする、独自のスタイルを確立。主な作品に「沓掛時次郎 遊侠一匹」(1966、東映)、「緋牡丹博徒 お竜参上」(1970、東映)、「みな殺しの霊歌」(1968、松竹)、「江戸川乱歩の陰獣」(1977、松竹)など。



「ざ・鬼太鼓座」の遙かな旅

仲倉重郎 映画監督(「ざ・鬼太鼓座」脚本・助監督)

加藤泰監督と一緒に佐渡に行ったのは、78年3月のことである。両津公会堂で初めて鬼太鼓座の太鼓を聴いた。締太鼓の合奏曲「モノクロームII」に、ぼくは体中が震えた。太鼓がこんなにメロディアスなものだとは思っていなかった。その夏、四国の公演についてまわった。どんな映像を創ればいいのか、脚本を書くのに鬼太鼓座のイメージを固めるためだ。

撮影開始は翌年の2月。佐渡は30年ぶりに雪の無い冬だった。雪を求めて新潟の豪雪地帯小出市まで出かけた。春は桜を求めて御殿場、秋は会津の裏磐梯、宮崎の都城と回った。大船撮影所でのセット撮影のあと、二度目の冬を佐渡で迎えた。今度は雪があった。そしてまた季節を追って、鹿児島島の指宿、開聞岳へ行き、最後は鳥取砂丘でクランクアップ。80年夏のことだ。そして、81年2月に完成したのだが、いろいろあって、公開されることはなかった。

脚本で一番考えたのは、どんな設定で演奏するか、ということだった。たとえば、太太鼓。ぼくは、脚本に、〈宇宙の混沌〉と書いた。では具体的にはどう現すのか、いろいろな意見が出た。最後に火山でやろうとなった。しかも生きている火山。喧嘩に以前ロケで行ったハワイのキラウエア火山を思い出して、美術の梅田千代夫さんに言った。梅田さんも一

緒にハワイに行ったスタッフだったので、話は早かった。加藤さんは、太太鼓を打つ林英哲の姿を真下から撮りたいと言った。真下から撮るには大きな櫓を組んで太太鼓と英哲を乗せるのが一番だ。しかしそれでは天井が近すぎて絵にならない。では…。そう、ステージの床を掘るしかない。しかも大船撮影所で一番大きな第一ステージの床だ(幸い撮影所のステージの床はコンクリートではなく土だった)。カメラマンの丸山恵司さんは、加藤さんの「人生劇場」では相撲取りに扮したくらしいの巨漢である。そんな丸山さんとバナビジョンカメラがすっぽりと納まる深さといえば、2メートル四方は必要だ。すぐに撮影部の助手さんや大道具さんたちがスコップで床を掘り始めたが、そんなことでは間に合わず、小型のショベルカーが導入された。おかげで、ヴェネチア映画祭でも大評判の英哲の超アオリのショットとなった。「ざ・鬼太鼓座」は音の映画でもある。録音の西崎英雄さんがすごかった。その一つ、津軽三味線は佐渡の外海府の冬の荒波をバックに奏でられている。普通なら波音を嫌い、荒波をバックに撮ることはない。だが加藤さんの絵コンテでは、津軽三味線のバックは当然のように荒波となっていた。

しかし西崎さんは驚かなかった。何もいわず絵コンテ通り、太太鼓の音を同時録音した。それは実に見事な音だった。この映画の若者たちは、その後、鬼太鼓座を離れ、「鼓童」を結成して活動している。林英哲はそこからも離れて、ソロの太太鼓奏者として世界中に名をとどろかせている。彼らにも、甦った「ざ・鬼太鼓座」をぜひ観てもらいたいと思う。

2月25日(土)～3月3日(金)限定上映! ※2/26(日)は休映

料金:一般 ¥1,800/大学生 ¥1,500、高校生 ¥1,000(要学生証提示)/シニア ¥1,100
メンズデー・レディースデー・水曜日 ¥1,100/火曜日・金曜日TCG会員サービスデー ¥1,000

地下鉄新宿三丁目駅B2出口より徒歩1分

シネマート 新宿

03(5369)2831 www.cinemart.co.jp